

字幕①

19世紀初頭にピアノが飛躍的に「機械化」されるにつれ、

人の演奏技術への追求もエスカレートしていく。

1814年にヨハン・ベルンハルト・ロギールが開発した<キロプラスト>という器具は、よく知られている。

手首が上下にブレないように、鍵盤に対して水平に移動できるように身体を矯正する器具である。

「ピアノフォルテでの適切な実行の獲得を容易にするための装置」として特許申請され、

こうした手の振れを抑える器具は、大衆のピアノ教育において広く受け入れられていた。

ほかにも、高速で上下する2本の鍵盤の上に指を置いて、すばやいトリルを弾くことができるようになる装置。

手を開いた状態で固定することによって、指と指の間を広げるための器具…

超絶技巧で知られたピアニスト、アンリ・エルツは、

手首に装着し、指を鍛えるための練習器具を考案した。

5本の指が、それぞれバネによって吊り下げられている。

それは『巨人の星』の<大リーグボール養成ギブス>さながら、

機械的に指の筋力を鍛えるものだった。

また、エルツはこの器具のための練習曲を1000曲も書いているという。

こうした技巧をのみ身につけるのための教本も多く出版された。

工場の生産性を上げるために、作業が細分化されたように、

いくつもの技巧が複雑に組み合わさった楽曲は細分化され、

テクニックを習得するための体操になった。

指体操としての音楽。

こうした機械的な反復練習や器具は「しつけ」のような意味もあったとされる。

ピアノは、19世紀の女性・少女たちの教養の一つとして重要視され、

その練習を通して忍耐や勤勉さを身につけていった。

それは彼女たちに、勝手なこと、余計なことを考えさせないための装置であったのかもしれない。

※行ごとに編集のための間(1秒ないくらい)を開けてもらえると助かります。

字幕②

ピアノと聞くと、黒光した、重厚な、格式の高い楽器といったイメージが浮かぶ。

一方で、ピアノの原型をたどると、むしろ素朴な弦楽器の延長にある楽器に行き当たるだろう。

チェンバロのインターフェースは鍵盤型をしているので、ピアノのイメージとは、そう離れてはいないかもしれない。

しかし、その機構は張られた弦を爪ではじくというものであった。

弦を爪ではじく機構では、指のタッチの差で音の強弱をつけることができなかった。

現在耳にするピアノの演奏に比べると、音が並べたような印象を受けるかもしれない。

鍵盤楽器は、こうした弱点を克服するために、改良され、

弦をハンマーで叩く機構が採用された。

その後も、18 世紀末から 19 世紀にかけて、飛躍的な改良が行われた。

より多くの音を出せるように、より大きな音を出せるように、より素早く弾けるように…

より「完璧」な楽器へと。

より重厚な「機械」へと。

19 世紀末になると、ピアノは更なる機械化の渦に巻き込まれる。

自動化である。

初期の自動演奏ピアノは、シリンダーで送風機構を操作して鍵盤を叩いていた。

この仕組みでの音の強弱などの表現はいまいちであったといえる。

その後 20 世紀に入ると、パンチ穴の空いたロール紙を制御に用いるようになった。

このピアノロールには、音の強弱やペダルの操作までが記録されており、

まさに、ピアニストの演奏を忠実に再現するものであった。

こうした自動演奏ピアノは 1920 代をピークに、蓄音機などの機器に市場を奪われていくことになる。

しかし、当時の自動演奏ピアノは蓄音機のような音響再生産メディアとは異なる役割が考えられる。

18 世紀から 19 世紀にかけて、産業の発展に伴って、新しい「市民層」が生まれた。

ピアノはまさにその「市民層」の社会的地位の象徴であった。

そして、ピアノは女性にふさわしい楽器とされ、「家庭」と強く結び付けられた当時の女性たちの教養とされたのだ。

そうした社会的背景の中で、自動演奏ピアノは、まるで家事を助ける電化製品のような広告が打ち出されていたという。

家庭的な雰囲気とはかけ離れた、華やかな装いの女性たち。

それはまさに、家庭内の「仕事」から解放された女性たちのイメージであった。

広告というのは誇張されたイメージに過ぎないかもしれない。

それでも、オートメーションによって責苦から解放されるユートピアを想像することは難しくない。

『プレイヤー・ピアノ』はカート・ヴォネガット・ジュニアの長編デビュー作である。

あらゆる仕事が機械によって自動化され、人間も IQ によって階級化された世界を描くディストピア小説だ。

機械技師の職人技は、まるでピアノロールのパンチ穴のように記録され、機械たちによって再生される…

世界は、少数の仕事をこなす管理者や技術者と、機械に仕事を奪われ、ほどほどに保障された生活をおくる大多数の人々に二分されていた。

管理者の主人公は、社会に対しぼんやりと疑問をいだきながら、物語は反逆の「革命」へとゆっくりと進んでいく。

物語は「革命」というにはややこじんまりとしたラッドライト運動が鎮静化していくなかで幕を引く。

街には打ち壊された機械の部品が溢れている。

そのさなか、自分たちが壊した機械を、散らかったパーツをもとに修復する元技師たちの姿が描かれている。

技師たちは自分達の技量が発揮されることに喜びが隠せない様子で、

彼らの仕事を奪うことになった機械の修復に夢中になっていた。

※行ごとに編集のための間(1秒ないくらい)を開けてもらえると助かります。

字幕③

19世紀初頭にピアノが飛躍的に「機械化」されるにつれ、

ディスクユニオン新宿店、確かビルとビルの際間に立っているような、細長いビル。

細長いエレベーターに乗って6階に着く。

細長く狭い部屋の角「ノイズ/アヴァンギャルド」という文字が掲げられた、棚の一角。

細長いCDの背帯に挟まれて黒い毛の塊があった。

嘘っぽい毛のつや加減。

いかにも偽物らしいプラスチックな触りごごち。

300円くらいだっただろうか。

毛の際間から、平たい板を引き出すと、舌を出す猫の写真に“HAIRBALLS”の文字。

そうか、これは毛玉か。

猫が毛繕いなどで体内に入った毛を塊として体外に吐き出すように、音源を聞くたびに光学ディスクが出入りする。

“Coughed up by Stock, Hausen & Walkman”

※行ごとに編集のための間(1秒ないくらい)を開けてもらえると助かります。

字幕④

プロメテウスの神話では、それぞれに生き延びるための性質をもった他の動物たちに比べて、

なんの力も与えられなかった人間に「火」すなわち「技術」が与えられたとされている。

ここでは、神に選ばれた人間ではない、不完全な動物としての人間が描かれている。

そうして不完全な人間は道具用いて身を守り、狩りをすることによって動物たちの世界を生き延びてきた。

握り拳の代わりに振りかざされた石は木の実を割り、回転する石は穀物を粉状に加工する。

道具というのは身体の延長であるともいうが、身体そのものというより、身体の「はたらき」の延長である。

つまり、道具を作るということは「手段」を作ることでもある。

これは機械も同じことで、その手段が複雑か単純かで道具と機械の間にはグラデーションがあるように思える。

単純な機械が道具で、複雑な道具が機械であると。

石臼は道具でも、水車と機構で石臼を動かせば機械になる。

ある目的に対して機能するということ。

その手立ての媒介性にこそ機械が生じるとも言える。

人間は不完全ゆえに生きていくための手立てを外化した動物である。

とすると、もともと完全な動物たちこそ、生きるための手立て、つまり「機械」を秘めているということにならないだろうか。

※行ごとに編集のための間(1秒ないくらい)を開けてもらえると助かります。